

里と里をつなぐ力

筆者が住み込んでいる山形の山村では、「地域づくり」という言葉に幅広い意味が含まれようとしている。自分たちの住む地域が他の地域とも結びついているという意識が芽生えはじめている。

ここ数年、村では、地域住民が様々な取り組みを進めてきている。特に子ども達への地域学習・体験学習のため継続的に住民で運営される「塾」や「学校」がいくつも設立され、それぞれのオリジナリティを發揮しながら楽しい活動を展開してきた。それは身近なものを素材としながら、本当に子ども達に体験させ学んでもらいたいという、地域の大人たちの思いを誠実に伝えようとした結果生まれた各地域集落のあたたかい手作りの取り組みだ。

こうした集落ごとの活動は、その集落の住民だけではなく「ヨソモン（外部参加者のこと、差別的な意味はない）」も参加するようになった。他ならぬ筆者自身もヨソモンだ。ヨソモンは、外部の風を地域に吹き込むと同時に、地域集落の小さな取り組みに普遍的価値があることを集落住民に気づかせる役割を果たした。外部から「見られる」ことは自分達を「見る」ことと同義なのである。

そうした取り組みは決して「イベント」といった類のものではない。筆者が所属する集落住民の運営学校「角川里の自然環境学校（角川自然学校）」の活動も個々の取り組み自体はそれほど大規模なものではない。1つの集落、それも20、30軒ぐらいを基本単位とした小規模な取り組みがほとんどだ。参加する子ども達だって、時には数人に過ぎないときもある。それでも同じ思いを寄せる人たちが、自分で身体を動かして作業員として取り組む里山保全活動や学習活動には、さびしい印象はない。それどころか、作り上げられた成果は、無農薬田んぼにしろ、畑にしろ、散策道にしろ、あずまやしろ、確かな形となってあらわれ、達成感と喜びが生み出される。そして、徐々に活動の輪は広がり、ヨソモンが参加するようになる。自分たちの活動に、ヨソモンも含めた多くの人々と共有できる可能性があることに気づかされる。里の住民は決して孤独ではなく、多くの人々と共にあることに気がつくのである。

小規模な取り組みとはいえ、里の仕事はかなり手間のかかるものだ。例えば、角川自然学校が取り組んでいる無農薬の畑（畑の学校）もそれほど大きな面積ではないが、大変な労働力が必要だ。一般にそうだが、農山村の環境を維持していくためには誰かが土を耕し、誰かが草を刈らなくてはならない。それは口で言うほど楽なものではない。しかし、みんなで共に楽しくやることは可能だ。例えば今年、畑の学校では、集落住民を中心としながら、村内外の方々も参加して作業に取り組んだ。畑は手を入れれば入れるほどよいものができる。夏にとれた野菜は他の集落の活動にも利用され、好評を得た。これから秋の収穫の

時期が楽しみである。そのときにはまた集落住民だけでなく、外部からも多くの人たちが集まることになるだろう。

「地域づくり」というとその地域の人たちがその地域のことだけに取り組んでいけばよいと考えるかもしれない。しかし、このところ角川では、よその地域づくりにもすすんで参加するようになった。先日も隣の大蔵村の活動に参加したし、仙台でも東京でも福井でも愛知でも、どこへでも行く。角川自然学校の山の学校の先生、斎藤久一さんはこう言う。「おらだのムラの活動は、地域の子ども達だけでななくて、こうした体験に恵まれない全国の子ども達にとって、あるいは大人達にとっても大切なことを提示できるんでねえべか。それは他の同じような山村を勇気付ける取り組みになるかもしれねえ、がんばんねば。」ここではもはや、地域とは、自分達だけの地域を指してはいないのだ。「地域」とは行政の枠を超えて、人の思いがある限り、無限に広がっているものなのである。